

第十五章 前夜のうごめき

日本からの一行より一足早く大連に来ていた阿保野論気二等兵は大連駅近くのホテルに部屋をとっていた。というより、満州映画社の甘粕正彦が朝鮮方面部隊に用意した部屋で、日ごろ見下していた将校が来るもんだと予想していた甘粕は、窓を開けたら隣のビルの壁が手の届くところに見えるような地上の地下牢のような部屋を用意しておいた。

三階であるが窓から数十センチに隣の壁がある部屋で、窓を開けてごみを捨てる支那人たちなので、狭い路地はゴミだらけの悪臭が漂っていた。

それでも、そんなことは意にかえさず、休日気分を満喫している阿保野論気二等兵だった。朝食と夕食がついていたので、食事の時以外はホテルのベッドに潜ったまま眠り込んでいた。軍票も大層な額を褒美にもらっていたが、もつたないから懐にしまったまま、食事の時間までをひたすら寝て過ごした。

最終日の夕食、ホテルの食堂に行つてビュフェスタイルの食事をしこたま食べて、部屋に戻ると部屋の鍵がなかった。どこに置き忘れたのだろうか？ポケットを探してみたが、ビュフェから夜食用に持ってきた唐揚げが入っているだけだった。

阿保野論気は窓の外の隣のビルとの隙間が狭いことを思い出した。外に出ると、狭い路地に入り込み、隣のビルとの隙間に両手両足を突っぱねて三階の自分の部屋まで昇った。幸い窓のカギはかけていなかったもので、部屋に戻ることができた。と思っていたら、それは隣の部屋で、コミンテルンの日本死ねシオリと言う女が配下の男を引き込んで情事の最中だった。

「お邪魔しましたとす。」

「こつり窓から外に出てまたとなりの壁との間を自分の部屋に戻る阿保野論気であったが、ロビーからくすねてきた週刊分春を隣の部屋に落としてきたままだった。

ポケットにしまった唐揚げをテーブルの上に置き、風呂に入つて寝ようと服を脱いだら、首から鍵をかけていたことに気が付いた。

「うちやなんばやつてんついでらんのじゃろう？」

鍵のことと言ひ、雑誌のことと言ひ、どこかしら運に見放されたような気がして落ち込む阿保野論気だったが、風呂で温まつて気分が良くなってきた。

少し風に当たつて冷まそうと、窓のカーテンを開けたら全身包帯だらけの謎の人影が目の前にいた。コミンテルンの日本死ねシオリの情事の現場を調べに来た飛驒忍者のミサオちゃんだった。

たった今まで湯上りでほてっていたからだが一瞬にしてクールダウンして、脂汗が噴き出て来る阿保野論気だった。きつと先日トラックで踏み殺した金日成が化けて出てきたのだと思つた阿保野論気は、布団の中に潜つて念仏を唱えた。

「なあむう〜。」

まだでは出てくるのだが、そこから先が全然思ひ出せない阿保野論気は、もつとしつかりお経を聞いておくべきだったと後悔したが、阿保野家は神道だった。

ミサオちゃんは窓越しにとりよりの部屋にたどり着き、日本死ねシオリたちが一戦を終える

まで息を殺して様子をうかがった。連中が第二戦への体力をつけるために、下の食堂に夕食を食べに行くのを待つて部屋に入り込んだ。

合戦の激しさを物語るベッドや飛び散るティッシュを目にしたミサオちゃんは「やつてられねえわ!」と、冷蔵庫からビールやウイスキーを出して腹いせに飲んでから、堂々と廊下に出てホテルを出て行った。

しばらく歩いていると、酔いが回って来てしゃがみこんでしまったミサオちゃんだった。

「どうかしたのか?」

と街を巡回していた憲兵が駆け寄ってきたが、全身を包帯グルグルに巻いたミサオちゃんが振り返って見上げると、悲鳴を上げて逃げて行った。

口が耳まで裂けていたとか、子供の手首をくわえていたとか、後々に尾ひれがついて夜警の憲兵隊が恐れる都市伝説となつてしまった。

赤井五平は翌日の満州鉄道乗車のために早々に眠りについた。赤井五平は満鉄でぜひともやらねばならない使命があつたのだ。徹夜で麻雀をすることで、満鉄で徹マンともなれば役が一気に跳ね上がる。当然、軍の司令とは全く関係がない自分が決めた任務だった。

ショウ・チャンツーは大連の場末のバーでミサオちゃんが来るのを待つていた。今回はアフロヘアにしてバイオリニストの葉加瀬太郎に変身したので、バイオリンケースを持ち歩いていた。

カウンターの隅で、水割りを混ぜる時に使ったマドラーでリズムを刻んでいる男がいた。何度か須田のオジキのキャバレーで見かけていたバンドマンのドラマーのスターキーさんだった。ショウ・チャンツーはマドラーで刻むリズムがモールス信号であることに気が付いていた。

バイオリンケースの蓋を開けたショウ・チャンツーは中に入っていた伝家の宝刀タンバリンを出す。スターキーさんに向けてメッセージを送った。同じ特務機関であっても陸軍直轄のショウ・チャンツーと中野学校のスターキーはそれぞれ思惑が異なっていた。

いつの間にかショウ・チャンツーの隣には全身包帯姿のミサオちゃんが来ていたので、

「背後にミイラがいるぞ!」

スターキーさんはマドラーでモールス信号を送った。

「心配するな、これはこちらの手のものだ!」

とタンバリンで信号を送ったものの、實際目の当たりにしたミサオちゃんに驚いたショウ・チャンツーは椅子からずり落ちてしまった。

「どうしたのその姿は。」

「水疱瘡で酷い状態なんです。八路軍とシオリが内通している現場を押さえました。」その言葉にスターキーさんもショウ・チャンツーの隣の椅子に移動した。テーブル席に移りたかったが、テーブルチャージを取られるので、予算の都合で見合わせる事になった。

「八路軍と通じている日本死ぬシオリとは何者だ?」

「日本で検事をやっています。」

日本政府にもこうしてコミンテルンに取り込まれる役人関係者も少なくなかった。

「どのような内容だったか事細かに説明してくれ。」

「いきなり騎乗位で上下運動して、そこから後背位でコンコンと……。それからアハーンのエヒーンハイホーの……。」

ミサオちゃんは詳細な絵を描いて事細かに目にし光景を説明した。日本語が全く分からないバーテンもその密談に首を突っ込んでいた。

翌朝、日本死ねしシオリと同じ部屋に泊まっていた八路軍の男が、港のヘドロの中に浮かんでいた。阿保野論気が部屋に入った時に落としてきた週刊分春を見つけたシオリは、八路軍が派遣したこの男が日本の出版社の記者だと疑ったのだった。

今回の銀河鉄道666計画で満鉄アジア号復活を任された屋島君には関東軍や満州映画協会以外にも多様な圧力がかかっていた。

陸軍に戦闘機などを寄付している中国人老婆の孫娘が、自分たち専用列車を出せと圧力をかけてきた。刈り上げ頭の蓮舫である。

ショウ・チャンツウの調査では、日本から逃げてきた共産主義者をソビエトに移送するのが目的らしかった。ソビエトで本格的な共産主義教育を受けさせ、再び日本に送り込もうと目論むコミンテルンの計画を実行しようとしていたのだ。

屋島君はもう銀河鉄道の定員は満席でこれ以上増やすのは無理なことなど説明したが聞く耳を持たない。一番でなくても良いと言うので、最終車両にもう一つ車両を連結して連結を乗せることでお引き取りを願った。

屋島君は今回の列車の乗客名簿に安德君が入っていることを知り、再会を楽しみにしていた。龍笛一家と同じ駅前高級ホテルに泊まっているので、出発前に訪ねて行こうと思っていた。列車には案内役として屋島君も乗り込むのだが、お互いの立場もあるのでプライベートで話せる機会は少ない。ようやく口うるさい刈り上げ女を追い払うと、駅前ホテルへと急いだ。

ホテルのロビーでは男前のカオリ家の息子たちが飛び回っていた。弟君はフリチンがすっかり気に入っておむつをしてもすぐ脱いでしまった。おむつは子供の自由を束縛する人道を外れた行為だと弟君は主張していた。

ロビーの外に出た時、自分と同じ年恰好の中国人の子供を見かけた。その子供はズボンをはいていたが、尻割れパンツと言って、しゃがみ込むとお尻がすっぽり出る作りになっている。その子供はいきなりしゃがみこんでウンコをすると立ち去って行った。ホテルのベルボーイが文句を言いながら石炭の灰を持って来て、ウンコにまぶすと、塵取りにとって、道路に放り投げた光景を目にした。

これではいけない、こうなつてはおしまいだ！と判断した弟君はお母さんの所に行つておむつをもらった。秩序とは法のみでまかなえるものではない、倫理こそが人格を形成しうることを弟君は悟った。

「出る前に教えてよね。」

男前のカオリさんの言葉に、そこそこが一番重要なんじゃないかなろうか？と考えるお兄ちゃんのタカシ君であった。

小さいお子さんも来てくれたんだな。苦勞した甲斐があったと、その様子を見ながら客室棟に向かう屋島君だった。

龍笛家の部屋に行くとはズバンドと武尊君は腕たせ伏せをしていて、龍笛さんは松山座のパンフレットの絵を描いていた。父親が武術家だが、母親は美術家だった。

屋島君が部屋をノックすると武尊君が出てきて中に招き入れた。

ズバンドと武尊君と二人でベッドに足を挟んで腹筋運動をしながら近況を話し、無事を喜び合った。しばらく見ない間に武尊君がたくましくなっているのに驚いた屋島君だった。

腕立て伏せをしながら獄門島にいるお能ちゃんのことを話し、背筋運動しながら満鉄での生活について話した。

松山座のポスターで見たことがある絵だと感じたのは、龍笛さんが描いていたからなのか！と屈伸運動しながら、初めて新京の本社で見た時のことなどを伝えた。

ようやくお茶になり汗をぬぐっていると、ドアをノックする音がした。

「ハイサイ！」

と、とろろん娘が入ってきた。九州のまさおさんにもらった辛子明太子を差し入れに持ってきたのだった。

「あ、あなたは国防雄弁大会で優勝したお能さんのお友達。」

「ハイサイ！鉄オタの屋島さんではないよーか。あぬ時やデージお世話んかいなりました。」

龍笛さんはとろろん娘が陸軍省に勤務して、今回の視察団の団員に選ばれたことや、屋島君が満鉄でこの列車を企画して一家を招待してくれたことなどを説明した。

「みんな立派に働いて、うちの娘もこうなつてほしいもんです。」

と言ったが、お能ちゃんは獄門島を巻き込んでもっと活躍していた。

「とろろん娘さんは憶えているかどうかわかりませんが、応援団に行った安徳君もこの列車に乗るんですよ。」

「安徳さんならおなじい船で来たサー。陸軍省でもぬー回か会つてるさー。」

「陸地測量部も陸軍参謀部でしたね。これから安徳君と会うのですがよろしければ一緒に緒しませんか？お能さんのことも話題に上がることでしよう。」

「行つてらっしゃいよ。」

龍笛さんも後押しした。とろろん娘と屋島君は安徳君を誘いに出かけた。

「あいつ、やっぱり人望があつたのかな？」

前蹴りの練習をしながら龍笛ズバンドが言った。

「あいつつて？」

「お能のことさ。だつてこうしてみんな訪ねて来てくれるじゃないか。」

「そうかもねえ。妙な男気がある娘だからねえ。」

この一家こそが学友たちの支えになっていることは自覚していなかった。

「今日はわしのおごりじゃ。女性たちだけだけどなあ。」

舞子売(まいこうる)中佐はホテルのバーでご機嫌になっていた。いかなる状況であれ一杯入ればご機嫌になる人だった。

「女性なら年齢関係ないのかしらっ？」

ッ。バラおばさんがカクテルグラス片手に問いかけると、

「戸籍さえ女性なら問題ありませんん！」

舞子売中佐はフルカワ先生の首根っこつかんで酒を飲ませていた。

その賑やかなバーの片隅で、安徳君は屋島君と再会した。卒業以来の再会だった。

とろろん娘も交えて、こうして皆が知り合えたのもお能ちゃんの影響だったことなどを語り合った。

「与一君がいれば顔ぶれが皆そろうのだけどなあ。」

と屋島君が言う

「与一さんなら一年前に会いなましちやよ。」

とろろん娘の言葉に二人は顔を見合せた。すでに与一君は行方不明になっている頃だった。

「どこで？どこで与一君に会ったんです？」

屋島君の鬼気迫る顔つきに一瞬たじろいだとろろん娘だったが、

「陸軍省で偶然会ったんサー。藤原中佐の所に来ていたんサー。」

軍服ではなく背広姿で、トレードマークの五右衛門頭はきれいに七三分けになっていたことなどを話した。藤原中佐と言う名から屋島君と安徳君はおよそのことを悟った。

その頃、与一君はソビエト極東のウラジオストクで情報工作をし、満州に戻る途中だった。中ソ国境の湖、ハンカ湖の南、アルセエフの街で一泊して山を越えて満州の綏芬河（スイフンガ）の街に入っていた。昭和二十年八月九日にソビエト対日参戦の第一陣はこのルートで攻め込んできた。

綏芬河から牡丹江まで列車で行き、しばらくはこの牡丹江で生活することになっていた。

与一君が何処にいるのかはわからないけれど、世間が噂するようなことではないと確信を持った屋島君はホテルを出て宿舎に戻った。

途中、建物の影から三人の人影が出てきた。時折金属らしい光が街灯の灯りに反射した。物盗りの類か？と身構えると、車道の反対側を走ってきた影が道路を渡ってくるなり、三人を一瞬にして殴り倒してしまった。

「おう、お疲れ！また明日な！」

と立ち去って行ったのは、夜のランニングから戻る龍笛ハズバンドであった。

未造技師は重慶から関東軍に配属され、旅順の二百二高地で法面の補修の任に当たっていたが、突然、警護兵として銀河鉄道に同乗せよ！と命令が出たのは出発の前日だった。

一カ所に腰を落ち着ける間もなくあちこちに回されるので、ブラック企業に勤務しているような毎日だった。

未造技師の上官は休日に私服で大連に行き、子供たちのお土産に銃や刀のおもちゃを買って街の中を歩いていたら、武装テロリストと間違われて憲兵に逮捕されました。ほどなく疑いも晴れて身柄は釈放されたが、連帯責任で未造技師たちの法面部隊は着任早々それぞれ転属となってしまったのだ。

未造技師は警護兵として銀河鉄道に乗り込む命令を受け、大連駅近くの兵舎に泊まっていた。アンニンなら「なんてこったい。」と嘆くところだが、「人生こんなもの」と任務に赴く未造技師であった。しかし、こんなことしか起きない人生なんじゃなかるうか？と疑いも半分

腹にあった。

大本營の計画では未造技師たちの部隊はサイパン島に回されるはずだったのだが、作戦会議室の配置表を軍人将棋と勘違いしたとろろん娘がいじくりまわしたおかげで、全く逆方面の満州に配属されてしまったのだ。後にサイパン島部隊は玉砕したのだから、あながち不幸とは思えないが、尋常ならざる人たちに振り回される未造技師であった。

とろろん娘がいじくりまわした配置表で最も当惑させられていたのはソビエト軍だった。リヒャルト・ゾルゲはじめ、日本のコミンテルンからも日本は南下する情報を得ていたのに、ここにきて急激に満州に人員を送り込むようになり、今度は陸軍の上層部が極秘裏に満州にやってくる。

米国と講和の密約でもできたのか？ドイツと日本の両方を相手にすれば到底勝ち目がない。日本のコミンテルンの連中、寝返ったか？スターリンの疑惑は膨れ上がるばかりだった。

「ギョエー……！」

魚影ではない。サカナ君と見まごうごとき金切り声の悲鳴を上げていたのは、陸軍参謀本部の辻政信参謀長だった。大本營が指示した配置を目にして自分の思惑とは全く異なっていたことに辻政信は意識が吹っ飛んだ。

早速この案を考案した作戦参謀を呼び行けたが、日ごろ無駄に威張られているので、

「参謀長がそのまま打電せよと命じられたので、おっしゃる通りにいたしました。」と、シラを切った。

何者が考えたのかはわからぬが、敵の意表を突く斬新な作戦であると、この参謀は敬服していた。エリートの方々は粋をはみ出さないで、辻政信参謀長の作戦は敵国に読まれていと疑念を持っていたのだった。

自分たちが作戦会議室を出た後、何者かが入り込んで作戦配置図を修正したに違いないとこの参謀は考えていた。その旨を部下に命じて調べさせていた。

「大尉殿、作戦会議室に入った人物が特定できました。東条英機閣下であります。」

東条英機はとろろん娘が掃除の検印書類と間違えて自分の名を書き込んだ、満州観光旅行の名簿を取りに入っただけだったが、

「さすが東条閣下。あの小生意気な辻参謀の裏をかく見事な作戦。敬服いたします。」作戦参謀たちは東条英機の発案と言う錦の御旗で辻政信に対抗できると確信した。

とろろん娘がいじくりまわした配置表だったが、東条英機が修正した作戦と言うことになり、日ごろから東条英機を見下していた辻政信はまた怒りがこみあげて狂うのであった。

その頃、闇夜に紛れて大連の港に入ってくる船があった。

船からは二十数人のピースでボートした人たちが降りてきた。抗日パルチザンの息がかかった日本で活動する共産主義者たちだった。

朝鮮北部の警戒が強くなったため闇夜に紛れて大連に渡り、列車で北上してソビエトに渡ろうとやって来たのだった。

大阪の高槻で未造技師の仕事を邪魔した連中もこの一団の中に入っていたが、既に内部分裂が始まり、朝鮮半島から大連にたるまでに半数の仲間が「総括され」黄海に沈められていた。それを仕切っているのが清美だった。

船から下りて来る一団をビルの上から監視している影があった。風魔忍者のマチ姐さんと、

飛騨忍者のミサオちゃんだった。

重慶ではシヨウ・チャンツーに飼われていた犬の次男坊はこの一団の後をついて行ったが、捕まつて鍋になつてしまった。清美達は日本人を装つていたが、犬を食べる朝鮮人の集団だった。こうして最初の犠牲者が出てしまった。

同じ頃、満州東部の掖河(えきが)第126師団でも日本名瑞穂を名乗る趙春花が国境を越えて満州に入り込んだ情報が入った。

黒竜江省のハルビンで工作活動をするのではなからうか?と分析され、守礼都徒郎(もれととろう)二等兵にも出撃命令が出た。

満州内に住む朝鮮族が手引きしているので尻尾を捕まえるのはなかなか難しかったが、拉致した日本人を人質にしている可能性があるのか?と手出しもままならぬ状態にあった。

しかも、日本の不穏な動きを察したソビエトも情報収集に動き出し、商人を装つて満州に入り込むロシア人が増えていた。

このどさくさに農産物をソビエト商人に高く売りつけて利ザヤを稼いだ左右翼は、ハルビンに出稼ぎに出かけ松山座公演を見に行くことにした。

ハルビン公演に向かう松山座一行でも大きな動きが起きていた。加奈子がハルビン公演を最後に一座からの引退を決意したのだった。

ハルビン公演が終われば日本に帰国する松山座だったが、加奈子はこのまま満州に残る決意をした。

「それほどまでに与一君を!」

と一座の仲間が同情したが、もはや与一君などどうでもよくなつていた加奈子であった。

柳沢家の息苦しい生活が本当に恵まれていたのだろうか?と加奈子は考えていた。確かに物質的には恵まれていたかもしれないが、まるで家を守るための「物」でしかない自分に疑問がわいてきたのだった。

女学校時代、ヘンリック・イプセンの「人形の家」を読んだ時、自由のために家族を捨てるノラが不道徳で納得いかなかったが、今はその気持ちかわかるような気がしていた。

大地から日が昇り、大地へと沈んでいくその暮らしを続けているうちに、細かなことに縛られている自分が嫌になつていったのだった。今なら自分の力で生きていける。プロレス修行で体力がついたら気力も湧いてきたのだった。

「新天地で自力で生き抜いてみよう!」

おしるこを食べ、乍ら誓う加奈子であった。ちなみにつぶ餡であった。

「いつも本当にお世話になってます。」

夜を徹して銀河鉄道の食堂車に食材と機材を運び込んでいる中岡三世料理長にありあわせの材料で中華丼を作ってもらつてごちそうになつている秋田のネロさんだった。